| | |
|---|---|
| 氏名（本籍） | 鳥 越 義 弘 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（　芸術学　） |
| 学 位 記 番 号 | 博甲第　7412　　号 |
| 学位授与年月 | 平成　27　年　3　月　25　日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | ジョヴァンニ･セガンティーニの油彩画における線状の筆触の研究 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　　査 | 筑波大学教授 | 博士（芸術学） | 内 藤 定 壽 |
| 副　　査 | 筑波大学教授 | 博士（芸術学） | 石 﨑 和 宏 |
| 副　　査 | 筑波大学教授 | 博士（芸術学） | 仏 山 輝 美 |
| 副　　査 | 宇都宮大学准教授 | 博士（芸術学） | 株 田 昌 彦 |

# 論文の内容の要旨

**（目的）**

本研究は、イタリアの画家ジョヴァンニ･セガンティーニ（Giovanni Segantini 1858-1899 年）の作品にみられる厚塗りの線状の筆触の表現効果について考察したものである。

ジョヴァンニ･セガンティーニは、イタリアやスイスを拠点として活動していたイタリア印象派の画家である。

印象派は筆触を活用することで、それ以前の絵画に比較し、鮮やかな色彩と躍動感のある画面を作り出すことに成功した。イタリア印象派のセガンティーニは、筆触を活用する点で共通するが、印象派や新印象派、ポスト印象派とは異なる、極めて個性的な表現を用いている。

セガンティーニの作品には、強烈な光の印象に満ちているものがあり、質感表現、量感表現も独特である。それらの表現が厚塗りで線状の重層化した筆触によりもたらされていることは直感的に予測できるが、それがどのような技法によりできているかについては不明な点が多く、文献では明らかにされていない。

この研究は、セガンティーニの筆触の構造、描画方法を明らかにし、さらに自らの作品に導入することを目的とするものである。

**（対象と方法）**

ジョヴァンニ・セガンティーニの油彩画作品における厚塗りの線状の筆触についての実見調査と、それに基づいた再現実験と作品への応用を研究の根幹としている。

第１章では、スイスでの実見調査を基に、セガンティーニの生涯と作品について、①ミラノ時代、②ブリアンチァ時代、③サヴォニン時代、④マロヤ時代の４つに整理している。対象作品は油彩画 75 点である。

第２章では、①印象派、新印象派、ポスト印象派の作品との比較によりセガンティーニの筆触について特徴を明らかにし、②セガンティーニの筆触の変遷についてまとめている。

第 3 章では、セガンティーニの線状の筆触がどのような表現効果をもたらすのか、4 つの観点から分析している。すなわち①モチーフの表現と描画について、②色彩効果について、③マティエールについて、そして④構図についてである。

第 4 章では、線状の筆触を用いる実際の描画方法について、制作者として検証、分析を行っている。具体的には①セガンティーニの制作方法の検証と再現実験、②厚塗りと乾燥、③筆触と制作環境の関係、④筆者の制作への導入である。

（結果）

セガンティーニの先行研究では、分割主義技法及び線状の筆触の視覚混合の効果に注目しているものの、厚塗りの線状の筆触による表現効果には注目されてこなかった。鳥越氏はこの点に着目し、まず筆触の形状の変遷を整理した。続いてその表現効果について、モチーフ、色彩、マティエール、構図という 4 つの観点から作品を詳細に分析し、①モチーフの単純化、明瞭化、②モチーフの量感の強調、③筆触分割による彩度、明暗の強調、④絵具が塗られた物体としての絵画作品の存在感の強調、⑤描かれたモチーフの存在感の強調、⑥明暗から色面構成に基づく構図への移行が見られることを明らかにすることができた。

そのうえで、上記のような効果をもたらすセガンティーニの厚塗りの線状の筆触が、どのような方法で作成できるのか再現実験を行い、極めて近い状態を再現することに成功した。さらに、自らの作品に厚塗りの線状の筆触を導入することで、マティエールはもちろん、色彩、構図など造形要素に変化が生じ、制作における新たな展開があることを確認した。

（考察）

自らの絵画作品への厚塗りの線状の筆触の導入により、制作における新たな展開があることが確認されているが、現代の美術界において確固たる存在感を示す絵画作品に昇華させることが、今後の研究である。

## 審査の結果の要旨

（批評）

鳥越氏は、セガンティーニの厚塗りの線状の筆触に着目し、その形状を詳しく分析することに成功した。スイスなどで行われた実見に基づく調査は説得力がある。この資料は、今後セガンティーニの技法を研究する上で貴重な資料となるであろう。

また、セガンティーニの厚塗りの線状の筆触により、印象派、新印象派、ポスト印象派と異なる表現効果が生じることを、制作を行う研究者ならではの視点も踏まえながら明らかにしたことを評価したい。

さらに鳥越氏は、セガンティーニの厚塗りの線状の筆触を作成できる絵画技法について再現実験を行った。線状の筆触の構造については、機器を用いた科学的な分析による断面図等の提示も可能であるが、再現実験を試みたことにより、具体的にどのような手順で作成できるかを提示することができた。これは制作を行う研究者ならではの手法であり、高く評価したい。

鳥越氏の研究は厚塗りの線状の筆触の表現効果に注目し、自らの作品に導入し、制作者として新たな現代絵画作品を提示することに重きを置いている。特定の作家について詳細に調査、分析、評価し、それを自分の作品に効果的に応用できている点についても評価したい。

平成 27 年 1 月 15 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。